

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

現在、鹿児島県南種子町（種子島）にある宝満池の周辺では、「突き網」と呼ぶ、①小さな手網を用いたカモ猟が、農家の人たちなどによりおこなわれています。専門の猟師は一人もいません。この猟はここでは昔からおこなわれており、江戸時代の『種子島家譜』という記録にも、突き網についての記述があります。

この猟は、昼間のうちは池で休んでいるカモが、周辺の水田地帯に餌をとりに行くためにいつせいに飛び立つ夕暮れ時におこなわれます。また反対に、夜通し落ち穂などの餌を食べていたカモが、餌場の田んぼから池に戻ってくる夜明け時分にもおこなわれます。

その時カモを捕ろうとする人は、池を囲む山の上で待ちかまえ、上空を飛び越えようとする瞬間に突き網を投げ上げて、カモを網に掛けて捕ります。猟のやり方は単純ですが、カモが池のどこからどの方向に向けて飛び立つかを見きわめる必要があるため、豊かな経験と独特なカンが必要とされます。

突き網猟の場合、猟の道具はほぼすべて農家の人が自ら手作りします。また、猟の時間は、夕暮れ時および夜明け前の各十五分間程度で、猟場も日常生活の範囲内にあるため、徒歩や自転車でかんたんに行くことができます。

ですから、一日がかりで、かつボートや猟犬など猟のための装備を多く必要とする銃を使った猟に比べ、はるかに猟の効率が高く、手間もあまりかかりません。この猟をおこなうのは、ほとんどが宝満池の近くに住む農家の人びとで、捕ったカモは自分で食べるほか、親戚への土産にしたりして、すべて自分の家で消費されます。

この例のように、もともと稲作農民による小規模な水鳥猟は、自分たちで食べるためのものでした。また、稲刈りが終わっていない田んぼでは、イネを食い荒らす害鳥と考えられていたカモやガンを退治するためのものでもありました。

しかし、大都市の近郊では、たとえば千葉県我孫子市などにまたがる手賀沼の場合のように、江戸時代以降、カモを江戸や東京へ出荷するために、稲作農民による水鳥猟が大規模におこなわれるところも出てきます。

加賀百万石の城下町として栄えた金沢にほど近い石川県加賀市②大聖寺の坂網猟は、その代表的なものでしょう。猟の仕方や使う道具は、③種子島の突き網猟と基本的に同じです。用いる網の形だけでなく、網を支える柄の部分の呼び名なども似ているところが多くあることを考えると、両者の間にはもとは何らかの交流があったと思われる。

ただ、両者のカモ猟でもっとも大きな違いは、大聖寺の場合、種子島とは異なり、カモ猟をする人たちにより組合が作られ、それにより猟がさまざまな管理されている点です。猟場となる片野鴨池の周りの山には、昔から「坂場」と呼ぶ猟場が細かく指定され、それ以外のところでは猟はできないことになっています。また、どの坂場を使うかはくじ引きで決められ、かつ、その坂場の中でも網をかまえる場所を順番で変えていくようにするなど、厳しい取り決めがあります。

また、種子島では狩猟免許さえあれば猟は誰でもできますが、大聖寺の場合には組合員にしか猟の権利はなく、その組合員になるにもやはりさまざまな取り決めがあります。カモ猟のための組合は明治初期に設立されたもので、お金を出した人による株主制をとっていました。その数は一〇〇株に初めから限られており、この株主が組合員ということになるため、株を持たない人は猟ができませんでした。このため、結果的に猟をする人の数も厳しく制限されていました。ただ、今では片野鴨池にやってくるカモの数が少なくなり、坂網で捕れるカモの数もたいへんに減ってしまったため、猟をしたいという人は二〇人ほどになってしまいました。そのため、株は実質的には意味がなくなってしまうています。

このようなさまざまな制限を設けた背景には、明治時代には片野鴨池のカモ猟が金銭収入の手段として重要な意味を持っていたことがあります。その当時、一株は一五〇俵（九〇〇キログラム）のコメと同じ価値があるとされ、実際、猟をおこなうため株を手に入れるには高額な金銭が必要であつたと言われています。

④稲作と狩猟とのかかわりでとくに注目されるのは、種子島や大聖寺の例で示したように、渡り鳥として冬にやってくるガンやカモを主な猟の対象とする点にあります。前にも述べたように、日本列島には田んぼや用水路・ため池といった人工的な湿地が多くあり、そこは多くの水鳥にとって餌を食べたり、羽根を休めたりする場となっています。とくにシベリアなど北の方からやってくる渡り鳥にとっては、冬を越すための場所としてとても大切なところなのです。

そのため、田んぼやその周りが、そのまま稲作農民による水鳥の猟場となることが多いのです。しかし、そこは人里でもあるため、銃を使うことは厳しく制限されてきました。手網や鳥もちを用いた素朴な猟の方法が、水田地帯の農家に現代まで伝えられてきたのはそのためです。

また、銃の使用が制限された背景には、地域に暮らす人びとの信仰が深く関わっている場合もあります。種子島の場合、昔から渡り鳥の冬越しの場となっている宝満池は、地域の守り神をまつる神社の中にあります。その水は、地域の大切な水田用水でもあります。当然、神社の池では生き物を殺すことは固く禁じられており、またその周辺でも銃砲などで大きな音を立てるこ

とは強くいましめられてきました。そのため、カモを捕るには、池から離れた時を狙い、しかも大きな音を立てることのない突き網を用いざるをえなかったのです。

かつて日本の農村では、稲刈りのころにやってくるガンやカモは、イネを食い荒らす害鳥とされてきました。そのため、収穫を前にした時期におこなわれるガンやカモの猟は、一部の地域ではイネなどの農作物を守るための行為でもありました。

そういった田畑を守るための狩猟は、水鳥のほかウサギについても見られます。とくに山間の農村では、秋になると「ヤトガリ（野兎狩）」と言って、村人が総出でウサギ狩りをおこなったところもあります。もちろん、

（安室知『田んぼの不思議』より）

問一 傍線部①「小さな手網を用いたカモ猟が、農家の人たちなどによりおこなわれています。」とありますが、農家の人たちが農業のかたわら「小さな手網を用いたカモ猟」をおこなうことができるのはなぜですか。五十文字以内で説明しなさい。（字数には句読点等もふくみます。）

問二 傍線部②「大聖寺の坂網猟」、傍線部③「種子島の突き網猟」とありますが、二つの猟の目的を、解答欄に合うようにそれぞれ二十文字以内で説明しなさい。（字数には句読点等もふくみます。）

問三 傍線部④「稲作と狩猟とのかかわり」とありますが、日本で稲作と水鳥猟とのかかわりが深いのはなぜですか。

問四 空欄部 に入れるのに最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 捕ったウサギは鍋で煮たりして、みんなで食べました。
イ 捕ったウサギを受け取る人は、村の長老が決めました。
ウ 捕ったウサギは、みんなで集めて神社に奉納しました。
エ 捕ったウサギは出荷して、村の金銭収入になりました。
オ 捕ったウサギの数は、制限内におさえられていました。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

佑は小学五年生。近所で独り暮らしをしている祖父に最近、認知症の症状が見られるようになった。祖父が転んでケガをし、週に三日、介護施設「こもれび」の入浴サービスを利用することになったので、それに付き添って行くのが、ちょうど夏休みに入った佑の役割になった。ところが、今日は祖父がどうしても施設に行こうとせず、付き添いの必要がなくなった佑は同級生の一平とプールで泳いだ。

ただならぬ胸騒ぎを覚えたのは、祖父の家の前まで来たときだった。玄関ドアが開いていて、中から声がちらつときこえたのだ。通り過ぎる耳に一瞬届いた声は、どうやら緊迫していた。

プールの帰り、佑は祖父の家に寄ることにした。気になったからだ。たとえば一平がぐねて学校を休んだら、帰りに様子を見に行く。そんな感じ。

空っぽになったガレージには、見覚えのない軽自動車が止まっていた。
誰のだろ？

自転車を止めた佑の耳に、今度ははつきり声がきこえた。

「ぼけてなぞおらん」

祖父の声だ。

「お父さんったら」

それを取りなすような、母の声も。

やつぱ。

佑は思わず玄関に走り込んだ。玄関に立っていた人が振り返った。

「あ、こんにちは」

（注）林さんだった。

「ああ、佑くん」

林さんは①笑顔を張りつけた。

「林さんが心配して、来てくださったただけだね」

一方の母は、眉毛が下がっていた。困りきった表情で、祖父を見やる。

おじいちゃんたら、こんな調子で。

無言の目くばせがそう言っていた。

「大事なことから、もう一度言おう。わしはぼけておらんつ！」

佑は母と顔を見合わせた。認知症は、自分が病気だという自覚が薄いのが症状のひとつであることを、知っていたからだ。

だからふたりで首を横に振り合ったのだが、林さんだけはうなずいた。

「そうよ、大内さんはしつかりしてるわよ」

わざとらしい言い方ではなかった。

祖父は黙った。そのまましばらく間をとったのち、小さく息をついた。そして、言った。②落着いた声になっていた。

「ただ、『どうしたいのか』なんてきかれたって、答えられただけなのだ。こっちだって、人の世話になりたくないのは、Aやまやまなのだ。けれども自分ひとりでは、できないことがあるのも知っている。そこへきて、自分がどうしてもいたいことを言ったら、強制してるみたいじゃないかね。わしがまるで、横暴な頑固じじいみたいじゃないかね」

いや、ちよつとはそうなんですけど。

と一瞬、思いかけたが、佑は祖父を見た。まじまじと。祖父の言い分は、わかるような気がしたのだ。

じつと見た祖父の目は、空洞なんかではなかった。見つめていたのは林さんではなく、自分の足元だったが、黒目にはしっかりと力があつた。

林さんもしばらく考え込むように黙っていたが、ふつと顔を上げた。

「なるほど。わかったわ」

感心したような声を出す。

「そうよね。そうよ。誰だって、誰かの世話になるのは申し訳ないと思ってるのよ。それを『どうしたいか』なんてきかれた

って、言いづらいわよねえ。こっちは、言ってもらったほうが楽なんだけど、世話をされるほうとすればねえ」

林さんはすっきりしたように笑った。そして、佑に向かつて説明してくれた。

「あのね、佑くん。私、今日は大内さんに希望をききに来たの。だって、せっかくこもれびに来てもらっているんだもの。もつと快適に過ごしてもらおうと思ってる。でも、大内さんの言う通りだわ。ありがとう。そう言われて、初めてわかったわ」

林さんにお礼を言われて、祖父は顔を赤くした。よっぽど恥ずかしかったのだろうか。

「うむむ」

と唸ったあと、

「わ、わしだって、好きでぼけてしまったわけではない」

そう言い残し、せかせかと奥に引ッ込んでしまった。

「申し訳ありません」

林さんに頭を下げた母の向かいで、佑はちよつと首を傾げた。③祖父が言い残していった言葉が引つかかったのだ。

もう少し様子を見る、と母が残ったので、佑はひとりで家に帰った。ダイニングでは、(注2)理子が焼きそばを食べていた。テーブルには、塩、コショウ、ソース、マヨネーズなどが並んでいる。

母が帰ってこないで、自分で作ったらしいが、ひと目見ただけで、焼きそばのびきつているのがわかった。

「食べる？」

が、勧められると、猛烈にお腹がすいていたことを思い出した。なにしろ、プールの帰りなのだ。

「うん。いただく」

フライパンに残っていた焼きそばを、皿に大盛りにして、かき込んだ。

「うつまー」

見た目通り、のびきつてはいたが、かむのもBもどかしいくらいの空腹には、充分おいしかった。

「そう？」

理子は不思議なものを見るように目を細めたが、なにかを思い出したみたいに、その目を戻した。

「おじいちゃん、今日、デイサービスに行かなかったんだって？」

「うん。今、心配してデイサービスの人が来てた」

いっぱい口をもごませながら、佑は答えた。麺はやわらかいくせに、キャベツとニンジンが固かった。しかも、ちょっと味も薄い。空腹が、あらかたおさまってくると、姉の作った焼きそばの、真の実力が見えてきた。

「味、薄かったら、いろいろあるから」

佑の箸が鈍ってきたのに気づいたのか、理子は、各種調味料を勧めてくれた。

「あのさ」

ソースを回しかけながら、佑は理子にたずねてみることにした。空腹がおさまったおかげか、引つかかっていたことを思い出したのだ。

「おじいちゃんって、自分がぼけてることわかってんの？」

祖父の口からは、「ぼけてなぞおらん」というセリフを、これまで何回かきいていたから、最後に言い残した、「わしだって、好きでぼけてしまったわけではない」は不思議だったのだ。

すると、理子は意外な返事を返した。

「たまに、ふつとわかるみたいよ」

「へ？ そうなの？」

「うん。だって私たちだって、気分には波があるでしょ。佑だって楽しいときもあれば、落ち込んでしまうときもあるでしょ」

「そりやあるよ」

遊ぶときは楽しいが、テストは嫌だ。悪い点数が返ってくると、さらに落ち込む。

「認知症の人は、その差が大きいらしいの。おじいちゃんも支離滅裂なときと、まともなときがあるでしょ」

「あるねえ」

「だから、まともなときには、自分がおかしいことがわかってしまつて、あせつたり落ち込んだりするんだって、お母さんが言つてた。おじいちゃん、この間泣いてたんだって」

「この間？」

「うん。お母さんが泊まりにいったじゃん？ あとからきいたんだけど、そのとき、夜中仏壇の前でごによごに言つてたんだって。『わしはどうしてこんなになつてしまったのか』って」

「そうだったのか」

佑は誰かに素手で、心臓をつかまれたみたいな気になった。ひゅつと体の芯が引きつって、胸が熱く苦しくなる。

理子が席を立った。こちらでも気分がよろしくないのか、浮かない顔をしている。

「昨日返ってきたテストが最悪で。このままじゃまずいから、自習室に行く」らしい。

「おじいちゃんにとつては、認知症は、ほかの病気になるよりも、辛かったかもしれない。プライドが高いから」

理子は、はーっと重たいため息をついたが、佑にもわかる気がした。祖父はじつにかくしゃくとしていたのだ。ちよつと前までは。

佑は荒い手つきでコショウを取った。ふたを開けて振りかける。

「ベックション」

④鼻の奥が激しくツンとしたのは、コショウのせいではなかった。

(まはら三桃『奮闘するたすく』より)

(注1) 林さん＝祖父が通っている介護施設「こもれば」で働くスタッフの一人。

(注2) 理子＝佑の姉。中学三年生。

問一 傍線部①「笑顔を張りつけた。」とありますが、どういうことですか。

問二 傍線部②「落ち着いた声になっていた。」とありますが、それはなぜですか。

問三 傍線部③「祖父が言い残していた言葉が引つかかった」とありますが、それはなぜですか。

問四 傍線部④「鼻の奥が激しくツンとした」とありますが、それはなぜですか。

問五 傍線部A・Bの意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「やまやま」

ア 本能のおもむくままに行動する様子
イ ことが実現することを恐れる様子
ウ ことの成り行きにまかせる様子
エ 実際にはできないがそうしたい様子
オ 仕方がないとあきらめる様子

B 「もどかしい」

ア 出すぎた態度でおこがましい
イ どうなるかと心配ではらはらする
ウ 思うようにならなくてじれつたい
エ 心が晴れなくてももんもんとする
オ 動作が危なっかしくてたどたどしい

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|----|----------------------------|----|---------------------------|----|----------------------------|
| 1 | ニクガ ^ン でも見える大きさ。 | 2 | 創立者のドウゾ ^ウ 。 | 3 | 地下シゲ ^ン にめぐまれる。 |
| 4 | 近所をサンサク ^ス する。 | 5 | 身のケツパ ^ク を証明する。 | 6 | ムソウ ^ダ にしない出来事。 |
| 7 | テツボウ ^ニ にぶら下がる。 | 8 | にわとりをシイク ^ス する。 | 9 | 先生のコウギ ^ニ に出席する。 |
| 10 | 日本画のコテン ^ヲ を開く。 | 11 | 木のミキ ^ト 枝。 | 12 | 商店をイトナ ^ム 。 |
| 13 | 空が夕日にソ ^リ まる。 | 14 | 検査のために血をト ^ル 。 | 15 | 友だちに本をカ ^ス 。 |

受験番号

氏名

点评

【—】

問

[illegible]

問二 大聖寺の坂網獵

ため。

〈種子島の突き網猟〉

ため。

ため。

問二

Downloaded from <http://ajphaphysocpharm.sagepub.com/> at 11:51 11 November 2014

問四

--	--

【二】

問

問

Downloaded from <http://ajphaphysocpharm.sagepub.com/> at 11:06 11 September 2012

問三

Downloaded from <http://ajphaphysiol.org/> at University of California, San Diego on June 11, 2015

問四

問五

【三】

11	6	1
12	7	2
む		
13	8	3
まる		
14	9	4
る		
15	10	5
す		